

「特集」

甦る仏像

奈良と新納忠之介

文＝植松二郎

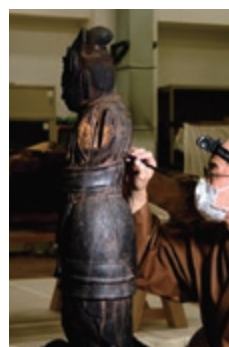
16 修理を究めた生涯

23 グラビア 甦った仏像

解説＝山口隆介（奈良国立博物館）

29 後の世に受け渡す

36 甦る仏像（案内図）



仏像修理を手掛ける美術院の職員の手で、仏像に色を載せる。古色を損ねないように、補色するのが肝だ

ちよいとお江戸の読み解き散歩 最終回

55 歌川広重「東都名所坂つくし之内

江戸見坂之図」

58 おいしいもんには理由がある 文＝土井善晴

福呼ぶ、臼杵ふぐ 「大分県臼杵市」

京都の路地 まわり道

7 文＝千宗室

冬の公園

古書もの語り

9 文＝内堀弘

『江戸名所図会』

ひとときエッセイ「そして旅へ」

11 文＝中井治郎

雨のカーテンの中で

12 わたしの20代

竜 雷太 俳優

特別企画

38 家康ゆかりのまち・静岡市探訪

若き日の家康を訪ねて

ホントビ！ 文＝川内有緒

42 全卓樹著『銀河の片隅で科学夜話』

〔熊本県阿蘇市・南阿蘇村〕

ナラカルト

48 スパイスの町・奈良でカレーが食べたい

地元でエール これ、いいね！

52 五島のかんころ餅「長崎県五島市」

ホリホリの旅の絵日記 文・絵＝ほりのふゆき

81 竹島フアンタジー館ほか「愛知県蒲郡市」

64 旬 News & Topics

66 美 Art & Entertainment

68 遊 Event & Festival

旅の小箱 from JR東海、JR西日本

70 おトクに充実した旅を満喫できる

冬の飛騨路キャンペーン

72 JR東海MARKET 1周年キャンペーン

73 国登録有形文化財に登録

山口蓬春記念館

74 「Japanese Beauty Hokuiku」キャンペーン

75 北陸の魅力を楽しむおすすめプラン

京都ステイションキャンペーン

76 第57回「京の冬の旅」

新幹線で九州へ！ 熊本・鹿児島キャンペーン

77 阿蘇・指宿、絶景の旅へ

大阪駅（うめきたエリア）

78 地下ホーム DEBUT！

ひととき倶楽部

79 読者からのお便り・投稿写真

80 今月のプレゼントなど

82 次号のお知らせ

ルートマップ

東海道・山陽新幹線時刻表



當麻寺金堂に安置された四天王の持国天（手前）と弥勒仏。白鳳時代の古仏で、修理を施しながら守られてきた
写真＝佐々木実佳（上も）

特集

甦る仏像

——奈良と新納忠之介

文＝植松二郎

Uematsu Jiro

写真＝佐々木実佳

Sasaki Mika

私たちが古仏を拝観できるのは、文化財を伝える専門家の仕事があつてこそ。

仏像修理の礎を築いた新納忠之介（にいろちゆうのすけ）という人物は、

師である岡倉天心のすすめで修理の道に入り、

東大寺・不空（ふくう）羅索（らさく）観音像、

唐招提寺・千手観音像など、

修理工房「美術院」を率いて

2600体以上の仏像修理を手がけました。

奈良の寺院や修理施設を訪ねながら、

新納が後世に残した思いに出会い、

古仏がいまここにある理由を知ります。

大脇手42本、小脇手911本の計953本の
手が輝く唐招提寺・千手観音像も、新納
忠之介が修理を手がけた 写真＝飛鳥園



修理を究めた生涯

時は明治時代、
神仏分離令が發布された後の奈良。
古仏をはじめとする文化財を
保護・継承するため
岡倉天心が仏像修理を任せたのが、
新納忠之介でした。

仏像は時の旅をしている。圧倒的な技巧
によって造形された、はるか遠い時代のこ
ころ、その驚きを、感銘を、いまに生きる
人びとがこの目で確かめられるのは、仏像
の時の旅を支える特殊な技術者のおかげと
いえるだろう。

近代から現代にかけて、国宝や重要文化
財をはじめ2600余ともいわれる数の貴
重な仏像の修理を手がけた伝説の技術者が
いた。明治が始まったその年に鹿児島に生
まれた新納忠之介^{にいろうちゆうのすけ}である。

郷里から東京へ出てきたのは17歳のとき。
海軍軍人をめざし、姉の嫁ぎ先を頼つての
上京だった。ほどなく隣家に住む同郷の洋
画家から絵画の手ほどきを受けるようにな
る。それが軍人ではなく美術をこころざす
きっかけだった。上京して5年後、忠之介
は東京美術学校（現東京藝術大学）の第二
期生として入学し、校長であった岡倉天心
と出会う。近代日本における美術史学研究
の開拓者との運命的な出会いだった。



新納忠之介は東大寺の転害門近くの奈良市雑司町に自宅を構えた。その旧居は現在、武蔵野美術大学の奈良寮として使われており、いまでも当時の姿をとどめている（＊） 写真提供＝武蔵野美術大学

木彫中心の彫刻科を専攻した忠之介は、
熱心に学び成長してゆく。きわめて優秀な
成績で卒業し、美術学校雇となり、まもなく
助教教授に任命される。その2年後、新納
忠之介の仏像修理人生が開幕した。東京美

術学校が岩手県の中尊寺金色堂^{ちんじんじきどう}の修理を依
頼され、29歳の忠之介は工事主任として美
術学校OBたちを率い、仏像修理の担当を
命じられる。「古仏保存はどうあるべきか」
を模索していた岡倉天心が、本格的な仏像
修理の経験のなかった29歳を抜擢したのは、
学生時代からの彼の研究熱心さ、対象に向
かう執念を高く買っていたからにちがいな
い。忠之介は期待に十分応えた。

その年1897（明治30）年、中尊寺金
色堂の修理が始まった数カ月後、日本の文
化財保護に関する古社寺保存法が制定され
る。明治初期に廃仏毀釈の嵐が全国に吹き
荒れ、仏像の受難があったが、あたかもそ
の罪滅ぼしともいえる動きだった。

中尊寺金色堂の修理事業の完成間近、天
心は、「美校騒動」と呼ばれる紛争を機に
東京美術学校を辞した。意をともにする教
師たちの多くも辞職し、天心たちは日本美
術院を創設する。天心を敬慕していた新納
忠之介が続いたのはいうまでもない。東京





ボストン美術館で仏像修理を行う新納。岡倉天心の勧めで1909（明治42）年に渡米すると、ボストン美術館で1年近く美術品の修復を担当。その後、ヨーロッパを歴遊して各国の彫刻を見て回った 写真提供＝茨城県天心記念五浦美術館所蔵（右も）

1937（昭和12）年には、京都・三十三間堂の千鉢仏修理を開始する。第二次世界大戦を挟み、竣工は1957年。20年に及ぶ大事業となった



美術学校を退職し、日本美術院の正員として参加した。初仕事は和歌山県だった。中尊寺金色堂と同じように美術学校OBたちを率い、高野山から始まり、紀三井寺や道成寺などを精力的に巡り、後世の修理技術者が感嘆するほどのスピードで精度の高い仕事を完了させてゆく。

忠之介、法華堂へ行く

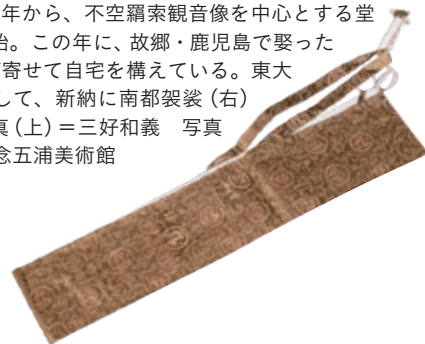
新納忠之介の足跡を追うなかで、晩秋の朝、天平随一の大寺、奈良の東大寺を訪ねた。広い境内にたくさんの人びとの姿があふれる。のんびり歩く鹿たちに親しみの声をかけながら石段を上って法華堂へ向かい、須弥壇中央に安置されている仏像の前に立った。不空罽索観音像。人びとを余さず救う綱である罽索を手にし、慈愛に満ちている。120年ほど前に忠之介はこの仏像とまさに格闘したわけだ、としばらく見上げつづけた。

1901（明治34）年、飛騨高山の寺の本尊の修理に携わっている忠之介に、師である天心から便りがある。「奈良東大寺法華堂の諸仏の修理に行ってくれ」と。

その6年前、東京美術学校の助教授になりたてのころ、忠之介は学術研究のために同僚たち数人と初めて奈良を訪れた。古都を巡って感銘を受けるなか、度肝を抜かれたのが法華堂だった。けたはずれの造形力に仰天した。その記憶が強く残っていた忠



天平時代創建、東大寺最古の法華堂。周囲には鹿がのんびり(左)。1901(明治34)年から、不空羼索観音像を中心とする堂内の諸仏像修理を開始。この年に、故郷・鹿児島で娶った妻・スマを奈良に呼び寄せて自宅を構えている。東大寺は謝意のしるしとして、新納に南都袈裟(右)を授与している 写真(上)＝三好和義 写真(右)＝茨城県天心記念五浦美術館



之介は身震いする。なんと恐ろしい……。

「先生はぼくを殺す気ですか」

天心、表情を変えない。ずっとこの教え子を見てきた師は、これからの仏像修理のあり方を示してゆくにはこの男しかない」と確信していたのだろう。

「そうとも、芸術のために奈良へ行つて死ねばいいじゃないか」

そのことばで忠之介は肚をくくった。奈良に引き移り、宿を構える。いざ始めてみると、どのように手をつけてよいかさっぱり見当がつかない。本堂の中に床を張り、じっと座り込んで3カ月のあいだ思案を重ねる。こんな貴い名仏をやり損なったら、二度とふたたび奈良に来られない。「ほら、やっぱりあの若造がしくじった」と日本美術史界からの袋叩きを覚悟しなければならぬ……。結果として、まさにいのちがけで取り組んだその大仕事は新納忠之介のその後の人生の計り知れない糧となった。

現在の東大寺に、文化遺産の修理の意義を聞かせていただく。

「遠い過去、その作品を渾身の力で造られた方、そしてこれまでに修理を手がけた多くの方々が高い技術で残してきた文化遺産であり、信仰の対象であるからこそ、修理後も形を変えずに同じように後世に伝えてゆくことが最重要。調査研究も含めて、さまざまな観点から継承を模索していかなければならないと痛切に考えております」

後の世に受け渡す

もし新納が仏像修理の概念や技法を確立していなかったら、現代の私たちは、ここまで立派な仏像の姿を拝めなかったかもしれません。奈良でしっかりと受け継がれている仏像修理の現場を訪ねました。



よく晴れた青い空に、ラクダのこぶのように、あるいは猫の耳のように、ふたつの頂がくつきり浮かんでいる。奈良と大阪にまたがる二上山だ。ふたつがいかに仲睦まじそうではのぼのした気分となりつつ、



万葉集にも詠まれた二上山の一番高い雄岳には、謀反の罪で命を落とした大津皇子が眠る。奈良盆地のどこからでも眺められる山として愛されており、當麻寺はその東麓にある

この山を背にして建つ當麻寺へ向かった。来る前に聞いてはいたが実際に仁王門を目にし、思わず声をあげてしまう。ふたつ並んで守っているはずの仁王様、金剛力士像のひとつが欠けている。まるで二上山のひとつの頂が姿を消したかのような喪失感。残るもうひとつの仁王様も恐い形相ながら、どこかさみしそうに映る。

そう、聞いてきたことは、ふたつうちのひとつ阿形像が現在修理中であるという情報である。さっそく、天理市の「なら歴史芸術文化村」へ足を運んだ。

2022（令和4）年3月にオープンしたこの施設は、4つの棟で構成されている。めざすは、そのなかの文化財修復・展示棟である。ここでは仏像や絵画・書跡、建造物や考古遺物などの修理を行う工房を一般公開。新納忠之介を初代の院長として出発した現在の美術院も全面的に協力している。忽然と姿を消した當麻寺仁王門の阿形像は、修理を受けるため2022年5月からここ

當麻寺駅から茶屋や釜飯屋が並ぶ参道を進むと、當麻寺の仁王門に行き着く。左には卍形の仁王像があるが、右の阿形の仁王像は、ニホンミツバチによる被害で修理中のため不在。境内は小学校の通学路にもなっているため、「早く戻ってこないかなあ」と待ち侘びながら通学する子供もいるそうだ





當麻寺 [上] 金堂の諸仏は白鳳時代の制作。塑像に金箔を貼った弥勒菩薩像(下右)は、鎌倉時代に右腕が修理された [下中] 四天王像は異国風の顔立ちが印象的だ(多聞天のみ鎌倉時代に補作)。金箔の剥落止めや補色など、寺宝修理には新納や美術院が携わってきた [下左] 副住職の川中教正さん。「1300年以上、仏様をお守りしてきた人々がいます。その思いは後世につなぎたいです」



へ移ってきているのだ。

「金剛力士像はヒノキ材による寄木造りで、頭部を含めお身体全体が空洞です」

学芸員の竹下蘭子(まゆこ)さんに教わる。

阿形像は、「あ」の形で口を開けている。

うんぎょう
阿形像は閉じているからそうならなかったが、開いた口からニホンミツバチが入りを始め、頭部にぎっしり巣を作った。すでに30年前から知られていたことだが、駆除することはしなかった。生息数が限られる希少な生物だ。生態系への配慮があった。それに、ここは寺院だ。ハチも守られるべき衆生(しゆじやう)である。

しかし、参詣者が仁王門を通るたび、ブンブン飛び回るのは困ったものである。おまけに大量のハチが入り出すことで、像全体にダメージがある。阿形像と比べると表面の彩色がかなりすり減ってきているのは、ひよつとすると巣作りの素材に使っているのかもしれない。やはり、ハチに引越しを願うことになった。養蜂家のような完全防護服をまとった美術院スタッフが現地で頭部を丁寧に外してみると、内部にハチミツがたっぷり。女王蜂を仮の巣箱に移し、巣全体を確保して原生林へ。

「30年暮らし続けたので、仁王様のお身体の中に古い巣などが山積していました」

阿形像をなら歴史芸術文化村の工房へ移し、まず徹底した掃除から進めていくことが決まる。クリーンアップを終えたら、入

旅行鞆に、本を詰めて



ホントビ!

第17回

文＝川内有緒
Kawachi Ario

写真＝荒井孝治
Arai Koji

作家の川内有緒さんが、本に動かされて旅へ出る――。登場人物を思うのか、著者について考えるのか、それとも誰かに会ったり、何か食べたり、遊んだり？さて、今月はどこに行こう。本を旅する、本で旅する。

今月の本

全卓樹著

『銀河の片隅で科学夜話』

物理学者が語る、すばらしく不思議で美しいこの世界の小さな驚異』（朝日出版社）



「一日の長さは一年に0.000017秒ずつ伸びている」と本書にあるように、この世に不変のものはない、天文学者の計算によると500億年後には、1日の長さは今の45日分の長さになるという。そうした、空想よりも現実の世界のほうが不思議だと感じるような、物理学者・全卓樹氏による22話からなる一冊。第3回八重洲本大賞・第40回寺田寅彦記念賞を受賞。

星空の下、遠くて近い宇宙を想う（熊本県阿蘇市・南阿蘇村）

私が生まれた日はどんな日だったの？

幼い頃そう母に尋ねると、「ジャコビニ流星群が来た日だよ」と答えた。

いま思えば、その答えは正しくはない。なにしろその年は、観測条件が良かったにもかかわらず流星が見えなかった謎めいた年として知られているからだ。

それでも、自分は流星が降る夜に生まれたんだと考えることが好きだった。

ああ、久しぶりに満天の星が見たい。



阿蘇を代表する観光地のひとつ、草千里ヶ浜。広大な草原の向こうには煙を上げる中岳（なかだけ）が見える

そんな私が手にするのは、ぜんたくじゆ全卓樹さんの『銀河の片隅で科学夜話』。副題に「物理学者が語る、すばらしく不思議で美しいこの世界の小さな驚異」とある通り、静かな夜にひっそりと読みたくなるような一冊だ。宇宙、生命、確率などをテーマに、科学とロマンがブレンドされた不思議な逸話が綴られる。本のはじめには、宇宙の方角を向いた天体望遠鏡を描いた美しいイラストが添えられている。

宇宙の中心はどこであろうか。実は

ナ・ラ・
ガルト

第5回

スパイスの町・奈良で
カレーが食べたい

奈良市

日本のスパイスの起源は
奈良にあった!?奈良とカレー? いったい何の関係
が、と思うなかれ。東大寺近くの正倉院はシルクロード
の終着点。はるばる外国から運ばれた
コショウ、クローブ、シナモンなどの
スパイスが納められ、千数百年もの間
大切に伝えられてきた。また『日本書
紀』には推古天皇が宇陀の野で薬狩り
をされたという記録があるし、いまま
県内には多くの製薬会社や漢方薬局が
ある。カレーとはさまざまなスパイスやハ
ーブ(薬草)を組み合わせて作るもの。
奈良はまさに、カレーを語るのにふさ

★ 菩薩咖喱

奈良市初のネパールカレー・
ダルバート専門店大のカレー好きで食べ歩きが趣味だっ
た吉村さんが、ある日出会って感激し
たのがネパール式定食・ダルバート。
「ダルは豆と玉ねぎの味わいを生かし
た素朴なスープで、日本のお味噌汁の
ような存在。全体的に油が控えめなの
で、日本人にとってもなじみやすい食事
です」と熱く語る。店名の「菩薩」には
「カレーというジャンルのなかで悟り
を開きたい」という思いを込めた1 定番「チキンカレー」が自宅で
作れるスパイスキット、レシピ
付き。他に「キーマカレー」「野
菜カレー」も 2 バラの香りが
贅沢な「ローズラッシー」 3
これが定食「ダルバート」。野
菜はピクルスやソテーなど、一
種類ずつ丁寧に調理されている

1



2

Yoshimura Momo

はじめまして。吉村
萌々です。皆さまと奥
深い奈良のカレー界へ
ご案内します!奈良・カレー界の
案内役

吉村萌々さん

ネパールカレー専門店「菩薩咖喱」店主。
またの名を「カレー菩薩ちゃん」。奈良
女子大学在学中にカレースパイスの魅力
に目覚め、ならまちのカレー店で働く。
その後、念願がなって自身のカレー専門
店を開店。目標は「奈良をカレーの総本
山に!」

3

〒奈良市薬師堂町21
時11:00~16:00
(LO15:00)
毎月・火曜古民家を改装した店
内はレトロ感もあり、
落ち着いた。不思議
なアート作品が置か
れた庭も見

おいしいもんには
わけ
理由がある

第 50 回

文＝土井善晴
Doi Yoshinaru
写真＝岡本寿
Okamoto Hisashi



豊後水道の西側に位置する臼杵湾。ここで獲れる臼杵ふぐは、ふぐ食の楽しみを教えてくれます

福呼ぶ、臼杵ふぐ

《大分県臼杵市》



[右頁]「御宿料亭 春光園」の臼杵産天然ふぐコース（9月～3月）に含まれる天然ふぐ刺し（写真は2人前）。臼杵ふぐのふぐ刺しは身を厚めに引くため、食べ応えがある。品のよい、濃い味が特徴だ。アサツキを巻いてポン酢にちょっとつけると、また格別。天然物のトラフグは秋から身がおいしくなり、冬の間は白子も楽しめる

[左] 臼杵市の中心街にある、「二王座〈おうざ〉歴史の道」を散策。阿蘇山の火山灰が固まってできた凝灰岩の丘を削って道を通しており、武家屋敷や寺院が立ち並ぶ

どい よしはる／1957年、大阪府生まれ。料理研究家、十文字学園女子大学特別教授。NHK「さよの料理」に出演。『一汁一菜でよいという提案』（新潮社）など著書多数

「日本の食品中で、なにが一番美食であるかと問う人があるなら、私は言下に答えて、それはふぐではあるまいか、といいたい」と説くのは、一代の美食家を自認する北大路魯山人^{＊1}。「ふぐの美味さというものは実に断然たるものだ」と、言い切ります。魯山人という芸術家の悪言^{＊2}はとりわけ有名で、ずいぶん人から嫌われたようですが、この希代のへそ曲がりの話には学ぶべきところが実に多いと、私は思うのです。

魯山人によると、ふぐの味とは、「すなわち、無作の作、無味の味とでもいおうか、その味そのものが、底知れず深く調和が取れて、しかも、その背後に無限の展開性をもっているものでなければ、真実の美味ではなさそうである」「ふしぎなような話であるが、最高の美食は全く味がわからぬ。しかし、そこに無量の魅力が潜んでい^{＊3}る」と言うのです。

小学生の時の誕生日。大人の話を聞いて、（毒を持つ）ふぐが食べたいとねだりました。少し食べては、毒で唇がしびれるんじゃないかと、おもしろがった記憶があります。その後も何度かいただく機会はありません

したが、彼が唱えるほどのふぐのおいしさを認識することもなく、今回、大分県の臼杵市を訪ねるまでわからずにいたのです。

臼杵市の市街地から10分くらい歩けば海にも山にも行き着きます。南蛮貿易で栄えた港、情緒豊かな白壁造りの町並みの城下町や丘陵地にある川崖に彫られた石仏にも、人々が行き交い生き生きと暮らしてきた歴史が色濃く感じられます。臼杵石仏と親しまれる61体の磨崖仏は国宝です。最古級は11世紀後半頃の作とされる大日如来を中尊に密教曼荼羅を表します。平安時代後期から鎌倉時代にかけて、都の木造仏に影響を受けて造られたそうですが、その制作経緯はわかりません。絶えず流れる岩清水に削られ、姿をとどめない石仏もありました。

九州を流れる一級河川の源流は、九州の水がめと言われる阿蘇。阿蘇山には全国平均の2倍にあたる年間約3200ミリの雨が降るのです。降り注いだ雨水は巨大なすり鉢状の岩盤に蓄えられ、長い年月をかけ、日本の天然水としては珍しくナトリウム、カルシウム、マグネシウム、カリウムの4